

日常的な授業改善サイクルの構造化

1. はじめに

授業改善サイクルとは、授業者の気づきの質を向上させるために行われる、教師集団における協同的な学びづくりと省察を繰り返す「DSR サイクル」による授業改善に向けた取り組みの総称である。

2 研究の目的

本校の第3学年は若手中心の学年編成であり、学びづくりを中心とした学年運営に課題がある。校内研究では、授業構想図の基本理念に基づいて実施されているが、個人の責任によって授業が準備されているという課題がある。毎日絶えず実践が積み重ねられている日常的な授業がいかにか充実し、子どもの学びが保障されるかが、最も本質的で重要なことである。本研究は、学年運営及び校内研究における授業改善サイクルが相互に関連して深化することを通して、メンティが自律的に授業改善サイクルを回すことができることを目指したものである。

3 実践1 日常的アプローチ

日常的アプローチでは「経験による学び」のプロセスである「ALACTモデル」(コルトハーヘン 2012)の理論を活用して、学年会でメンタリングを実施する。メンティが自身の発達方向性を決め、客観的に自身の発達を捉えるために他者と協働で「ALACTモデル」のサイクルを自律的にたどれることを目指している。

4 実践2 研究的アプローチ

研究的アプローチでは、授業デザインと授業リフレクションの理論に基づいて、同僚との協同による学びづくりと省察を行う。

授業の構想段階では、授業デザインの6つの構成要素(目黒 2011)に基づいて、メンティの考えを引き出す。授業展開では、本校校内研究の中心的理論である協同的探究学習(藤村 2012)を取り入れる。学びづくりの観点から、学びの3つの構成要素「真正の学び、学び合う(聴き合う)関係、ジャンプの学び」(佐

横浜国立大学教職大学院 教育学研究科高度教職実践専攻

山田 剛輔

藤 2012)を取り入れる。

授業観察の際は、教師と子どもの言動を詳細に記録(メモ、録画、録音等)する。全体を俯瞰しつつも、2~3名の教師が3~4人の子どもの中心にして、子どもの姿(表情、しぐさ、つぶやきといった個々の学習者による多様な表現の総体)を定点で観察し、つぶさに見取って記録する。

授業リフレクションとして、「当事者型授業研究」(鹿毛 2016)を実践する。研究協議会では、授業記録ですべての子どもたちから見取った姿を固有名詞で具体的に語ることを原則とし、当事者(授業者・子ども)尊重の研究協議会を行う。協議会を終えたのち、「カード構造化法」(目黒 2012)を授業者で行う。

5 分析方法

校内研究直後の学年会談話、「カード構造化法」の内容、授業記録等の変容を分析する。合わせて、メンター不在時の学年会談話分析を行うことによって、メンティが自律的に授業改善サイクルを回すことができるかどうかを明らかにする。

6 研究によって期待される成果

学年運営及び校内研究における授業改善サイクルが相互に関連することによって、メンティの気づきの質が向上し、授業改善サイクルが日常レベルにまで波及することが期待される。

【参考文献】

- コルトハーヘン(2012)教師教育学.学文社
藤村宣之(2012)数学的・科学的思考のリテラシー.有斐閣
鹿毛・藤本・大島(2016)「当事者型授業研究」の実践と評価.教育心理学研究,64(4):583-597
目黒悟(2011)授業デザイン.メヂカルフレンド社
目黒悟(2012)授業リフレクション.メヂカルフレンド社
佐藤学(2012)学校を改革する.岩波ブックレット